



澄禪和尚行狀記 下

此標題
高貴御
筆貺之
擬證誠

u.785c
1805
vol 3/3
佛



澄じやうぜん禅ぜん和わ尚しやう行ぎやう状じやう記き下げ



○師し乃の採さい履り奇き跡せきをを爰こゝ小せう記きとともも。室むろ九く牛う此こゝ

一いち毛もう少せう毛もう一いちつつららじじやや。粗あら寡くわ少せう及およふふ不ふ可かをを

舉あるる乃の。就すなは中ちゆう富ふ士し見けん佛ぶつ。及およ神しん仙せん龍りゆう鬼き

等られれ童どう陽やうハハ堅けんくく秘ひしてして他たはは洩しやうしたたままええ

ざざりり。代だい。上じやう乘じやう往じやうにに述じゆつししががおおととくく。余よハハ

多た年ねん親しんくく思し悔けをを羨せんりり。道だう契けい日じつ久くかかりり

ははままりり。語ごををししるる。其その言ごん語ご其その端たん

行状記下

小因ちよなむらくち強あかぢ小尋たねまりにに希まれ小一宣さひ
出いける幸ととと左さ世せ小ハ口くち外がいせらりき滅めつ
後ご我われ初はつりくかむりり希け有うなり。念ねん仏ぶつの
巨こ益やくとと大だい悲ひ傳でん布ふ化け乃ん乳に公こう如にくハ恐おそらくハ
佛ぶつ菩ぼ薩ざつ乃ん淨じやうらろろろもも肖せいき且大だい法はう懺ぜん
此こ罪ざい懺ぜんともるりなむむよりく等たうれ拙さを
をを顧くわんにに猥わう小せう先せん師し乃ん香かう乃ん顛てん末まつをを記き
く有孫そん乃ん贈くわんるるれるりまままとと思いむ人

若し隨ずい者しや一一てて信しん根こん乃ん培つちかむ孝にに其その人ひとをを得え
ふりととせん又退ちゆうひく疑ぎ網もう乃んかかるるべくハ
毒どく鼓こ乃ん孫そんととせむ。冀い信しん疑ぎともにに廣くわう大だい乃
因いん孫そん空くう一一かかららにに潰つぶ毀かい等とう一一く萬億いっれ佛
我われををえんなんとと。爾に云ふ。

贊さん曰く。巖いん居こ弊へい服ふく本ほん食じき古こ之の所ところ或ある能う而しか今いま之の稱せう
道だう人にん者しや則すなは必かな能う也なり。今いま之の過とが於お古こ乎や古こ之の不ふ及た
乎や今いま乎や噫あ何な如ごと哉や。曰く。物もの必かな有あ贗がう雜ざう入に亦また有あ濫らん

行狀記下

人存焉。夫養心於禪。於慧而巖密之居。弊服
之服。是古之真人。而可貴矣。可重矣。夫或養
心。干利。干名。而豈惟巖居。弊服。不祝。爪髮。不
除。蚤虱。如此。如此。千怪萬態。至於古之所不
可及其迹。如世。而其所養。如彼。則去真遠。又
遠矣。豈非濫人乎。嗚呼。心也。迹也。不慙於真
古者。其惟此師乎。可貴矣。可重矣。

行狀記奉文記

附録

○余世書と著述とある時。客あり。草案と披
讀し。隨處して且つく。師ハ實小貴むべ
く。更よ言語乃及所。子。非と但聊も学
び得る所あり。何あり。若自己往生乃
小をい。其益た。んも。只隣の寶と
乃こハ。半文抄も我者に非る。が。と。今
一箇の問を奉く。自他生死の大事と稱す

行狀記下

毎一^{ねがハ}。輕くハ人情^{にんじやう}を疑^{たが}きて。是非^{ぜいひ}分明^{めいめう}。眞^{まこと}實^{まこと}を疑^{たが}へまま先^{まづ}下^{くだ}れ往生^{おんじやう}ハ否^{いな}。
 如何^{いかん}が定^{さだ}たまへるや。答^{こた}故^こ和尚^{おんじやう}乃^なこころハ。
 猴^{たつひ}人^{ひと}有^ある志^{こころざし}を勵^{たげ}まとも。實^{まこと}に及^{およ}ぶべか
 らば。されを信^{まこと}乃^な淺^{せん}深^{せん}よりなり。九^く品^{ひん}其^{その}
 階^{かい}級^{きゆう}も有^あべ。又^{また}往生^{おんじやう}ハ得^えるも。成^{なり}仏^{ぶつ}
 至^{いた}る速^{すみ}速^{すみ}なり。んを有^あべ。に爰^{こゝ}小^こ別^{べつ}論^{ろん}あ
 り。中^{なかつ}も暫^{しばしば}より。自ら^{みづか}往生^{おんじやう}ハ一^{いつ}大^{だい}事^じ

小^こ於^おくハ。先^{せん}師^しは問^とく安^{あん}公^{こう}決^{けつ}定^{てい}せること。
 上^{かみ}來^{きた}乃^な卷^{まき}し。述^{のたま}るごとく。何^{なん}ぞ再^{また}得^え否^{いな}と
 論^{ろん}せんや。客^{きやく}亦^{また}問^と曰^{いは}。本^{ほん}教^{きやう}を信^{まこと}じて。一^{いつ}會^{かい}十^{じゆ}會^{かい}
 も生^うまると思^{おも}ひたり。教^{きやう}遍^{へん}を勵^{たげ}。命^{いのち}終^{おひ}と
 待^{まち}乃^なことハ誰^{たれ}も知^しらざる事^{こと}なれども。さ
 らり安^{あん}心^{しん}と安^{あん}ゆる中^{なかつ}。往^{まう}生^{じやう}を道^{みち}びと
 名^なゆる人^{ひと}。古^こ今^{こん}不^ふ少^{せう}。あらずをたてし。ま
 ず小^こもりか。人^{ひと}其^{その}心^{こころ}乃^な實^{まこと}ハ。知^しるべから

げまを論じて益れ。只佛乃こ知見した
まふ。魚一とつども又もりれき中の同明ハ
世一大事を歎く。今せざるや。はるふも
往生に難易。書籍に載。又と語り傳る所。扱
挙小違あらむ。其中小難きを挙く。あま
を云も。宋朝。或一僧死して冥界より
孔。同王永明乃智覺禪師乃親を圖して礼
おせらる。あまを冥官小是をとく人

死して必中者を強ふ。小。同王生所を判せ
む。とい事奉れ。然るは禪師ハ。爰小初ら
ま。直に上品上生乃往生を遂す。ゆへ
る。此希有なれば。深く敬ひ。如世と彼
僧蘇生して。永明寺に來て。此を説。禪師
に真影をおせ。本。雲棲大師往生集に
出。和漢是を信じて。小。今至。是往生に
易く。先跡乃一なり。且賢。因。經

行狀記下

等れ經釈に載る所を初とす。明惠傳に
解脱上人其夢中談沙石集に著す教
本朝古來諸宗乃名匠多く魔界に落
事実又同く沙石小竹某の宰相世を遁
ま。高野に住く。淨業他たす。枕中臨終
乃十念正しく相續せん事を奉以祈
果して命終乃十念分明に而之終す一
考人れ彼を警以計高考乃まも息絶

一とくや。平日乃感應ありにあり。決定往生
乃人なりべいと。各是を隨喜に然るに翌
年同明に託して。悩を奉あり。依る人回
日はと云。臨終といひ。定むる往生を遂げん
べーと思へ。案れ外に。今日れありさるる
公得神といへ。答わき念仏不退に淨土を
欲求せし。所問乃如く。但人志まじ。考小心
頭よか。奉あり。當世乃政直か。我

行狀記下

朝廷乃津小あづろくむかむくはるぐろ
を。此会よさへらまき。素懐を遂げ
云く其平日此妾会とさうとあま。臨終に
にして人え隨志せし程よ。念仏相續し
終し一人也。如世されむ我等が日は
ま程乃妾会と起らむと。陳さるべや言
小出くこころいしね。恥恐あむりれ
もも実よ起せり。又技桑往生全傳に録

出せり。泉州岸和田。淡谷氏芳忠れ母妙祐元
禄十四年三月十日。行年五十五歳にして卒に。
前年十月中旬旬病を得く。翌乃春二月十五
日より臨終より方まで。志むく好相と感
に。二月廿四日己小命終り臨むが。漸
暫有く目を開く。如世なることあま。こび
なり。宿善開敷して。浄土乃上品上生し
神遊とといへども。餘報未盡なるあり。尚如

行状記下

此といふなり。爰小者孫乃縑素來訪して彼
土に莊嚴及佛菩薩の真相をとりし其答
所悉に説と。暗に符合に其中或人問
曰降土よ生る者と。地獄に墮る者と。多
何答往生する者多しといふと。能地獄小
落るるをばく多きふ及ぶなり。又餓鬼畜
生小流轉するもの繁多なる事。在地獄
乃者に超過に。且有孫先亡乃僧俗を問ふ

に其説往生する者ハさくれ。殊に近來
世小鳴る。智者學匠又と念仏行者れ。往生
を遂ぐるあり。其中よれよ生流く。漸く
中下品よける等の稱ありといへども。記者憚
る所有て集中これを詳しせむ然れども。
余は能く傳る所をさぐり。又問何乃用公
をれして。而も往生を得むと。答曰阿な
悲もかく願廣し。常に濟度を欲し。然き

行大正

150-151

ども。公等こうらうを承てまか生なませざるは。あらず。仏ぶつそれ
 公等こうらうといふむといひ。世位よゐ女によハ。生質なま銚しやう口くちにの
 を合あむが。あつと。分明ぶんめいよ人と。對話たいわを。あらず。不能ふじやう。
 夫それ只ただ蒙然もうぜん。あつ。愚朴ぐぼく乃すなはち女子にょしなる。乃すなはち。然しかるに
 上かみ小記せうきを。あつと。二月廿四日。合掌がうしやうして。目めを閉し。
 奄然えんぜんと。あつと。逝ゆが。あつと。暫まじ有ありて。目め代しろ并ひら言げん。
 語ごさる。乃すなはち。後のち。至いたり。理り明白めいぱく。詞ことば無な河が乃すなはち。ここと。く。け
 て。微妙みせうなる。幸さい。等どう舌ぜつに。及およぶ。魚う。う。は。と。う。又
おのまじは

往生おんじやう要集ようしゆハ。今世こんぜ念仏ねんぶつを行なむる人ひとも。多おほき
 き。と。と。往生おんじやうと。遂する人ひと乃すなはち。く。れ。る。ハ。実まことを
 致いたさ。幸さいれ。な。る。ゆ。へ。る。と。云。く。又。寛文くわんぶん十じゆ二
 年ねん乃すなはち。春はる。下しも総國そうこく墨田すみで郡ぐん羽生は村むら乃すなはち。女によに。死し。童どう託たく
 して。冥界みやうがいれ。を。洗せん。因ゆゑむ。當郷たうきやう乃すなはち。老少らうせう
 集あつ。乃すなはち。靈れいれ。亡なせ。廿六にじゆ年ねん前まへより。已このころ來きた者もの
 孫まご先せん亡なれ。生なま所ところを。終日しゆうじつ尋たづ。に。往生おんじやう。一ひと人にん
 一ひと人にん。餘あまハ。皆みな墮お獄ごく乃すなはち。一ひと人にん。と。答こた。小こ共とも比ひ祐ゆう天てん

大僧正飯沼乃弘教寺に掛湯一移ひて。程近
 かよきれども里人請ひて。教化をうけ奉
 りしに。か乃壺速に解脱を蒙奉を得たり。
 其間乃回答。未曾有なる事。今に傳へて普
 く人口小あり。筆記して。死壺解脱物語と
 号し。和字に書たりと思ひ下し。又追鄙乃
 一女子。狐狸之や託し。引らむ。豈其言を信
 じらに足むやと。誤く毀る事れく。真実了

生死をなきに。奉教念仏よする人ハ必
 るるべき書なり。扱上米教箇に説よりなる
 時ハ。往生れる甚危し。然らむ。何ぞ觀經小
 五逆も念仏往生と説き。乃至宗祖上人
 乃釈よハ。三仏も亦ある。三仏四修も亦無何
 ら。只申すに。されども。往生さるごとく。公得
 よ。安しと思へども。安きなり。この教ハ。人皆
 知所なり。又上人乃傳寫ありて。照し。るる

行狀記下

Shūkyō

小ハ眾乃輕重信レ淺深ともせんせんに念仏ねんぶつと家
人乃往生おうじやうせぬハ有あべべくくははとこそとみえみえたたまま。
然しかるる小念仏ねんぶつ一いちちががらら。墮獄だごくととるるハ如何いかん。ささまま
むむととて佛祖ぶつそ乃説せつううががふふくくららに將往生しょうじやうじやう
難なんくく上じやう來らいれれ幸さいくくええ。信しんととべべくくおおいいんんととれ
ままくく。經意きやうい小符ふ合がままれれままれれ。扱さて何なに教きやう小如くわ
世古今よこひに往生おうじやうと志しそそんんどどるる人乃多おほくくややら
むむ必かならず其その侍しやうるる所ところああるるべべくく一いちち朝あさ公こう乃なり起たりり初はつ

しより。二六時にじふろくじ中ちゆう著ちやく衣え喫きつ飯はん乃なり間あひだと志しままくくは
同行どうぎやう乃なり疾いんくく知識ちやくしき小回こくわいへへむむ。益やくちちなりなり。他た乃
不ふ往生おうじやう沙汰さたととあありりままくくもも。一いちち向きやう佛祖ぶつそ
乃教きやう乃なり任まかせくく人ひとと志しるるここななふふもも。自みづかれれくくけ
そ。大地だいちハ打うちををげげままくくもも。我われ乃なり決けつ定ぢやう往生おうじやうれ
ことこと思おもひひ極きやくるる外あうなりなりれれとと是これ新あらたくくままぐぐもも
ちち。幾いく度たびくく心こころをを敷かくく。強あかくく其その心こころににままぐぐて
これこれどどもも。家いえ因いん縁えん乃なりやや聊いささもも疑ぎ網まうぬぬききたた真まこと

行狀記下

讀よ會い仙せん七しち万まん遍べん乃すなは日に取と作さハ勤つとをがらうかき果まつ
 亂らん安あん心しん小せうぞ成なり々々依よ決て定さる事依よ決て定さる事依よ決て定さる事依よ決て定さる事
 免めん強きやうへと明めい首しゆ仙せん小せう祈いのとし強きやうもや不ふ可か思し議ぎ
 此こ明めい師し小せう留りうして世際さいを極くり畢ひつ竟きやう人にん毎まい
 小せう本ほん邪じや小せう案あん小せう案あん小せう案あん小せう案あん小せう案あん小せう案あん小せう案あん
 せせざざるる所ところ有あて其遠とほいれれ少きなりより昇沈しん
 遙とほく隔まり喻たとへる舟ふね楫かじを終り内へ扱
 外そとへ押す行先ゆ子さ里きれらいと取とりことく激こ細さい

乃すなは所ところ小せう大だい事じ有あり愚者ごハ是これをいふ事也なり
 智ち者ごハ大だいには怖おそる去小せうても世はくいをむを
 如い何なん公こう得とく強きやう小せうやと予よ白はく世せい一いつ大だい事じとさばらり
 歎なげく人にも値ちハざりき即すなは今いま驚おど嘆たんれあま
 了り茫然まうぜんとして答こたむとしるに言れし輕かろくハ
 先ま高かう論ろんを受む客れ曰會かい仙せん門もんと知解ちげをも
 捨すて愚ぐ小せうなりて修むるを專と習来きたれる
 ちれむ益さらは胸中ちゆうちゆうを朗小せう一いつ往かう生じやうすん一いつ

行狀記下

大事だいじを歎なげく乃なこになりて論ろんぶべき所ところ
 あり。但たゞし十八じゅうはち五ご本ほん釈しゃくの三さん公こうをあらざるにつま
 て至ま心しん信しん樂がくれ四字よじを。釈しゃく成じやう就じゆ乃のち文ぶんよハ信しん公こう
 歎なげ盡じん乃のち至ま一いつ會かいと有あり善ぜん尊ぞん大だい師し是これを歎なげして。
 歎なげ盡じん至ま一いつ會かい皆みな當たう得とく生じやう彼かと宣のたまく。此この歎なげ盡じん
 也なり。三さん公こうれ中ちゆう乃のち骨こつ髓ずいよして信しん公こう歎なげ盡じんさへあ
 まる。三さん公こう皆みな具ぐ足そく以もつ第だい廿にじゅう九きゅう也なり。歎なげ盡じん公こう欠けつさ
 家け故こよ。三さん生じやう果くわ遂すいとハち家ける。はまづん本ほん釈しゃく

小せう値ぢる事ことと深ふかく歎なげ盡じん。佛ぶつを二に河がなく
 頼たのみて打う任にんを奉ほうるれ。爰こゝ小せう下げ爪けん往じやう生じやうれ
 人ひとハ苦くに責せらまて。暇いさまをけまて。頼たの母ぼ爰こゝ歎なげ
 盡じんするまで小せうハ至まる。只ただ口くちうアに念ねん仏ぶつに
 と乃なこ見みゆきごりも。さハ冰ひやうも。苦くよ責せられ
 て而しかも火くわ車しゃ來らい現げんも目め小せう在あ他た乃のち救きうひ何なに哉かと
 思おもふ場ばなれど。如ごと何なにゆも善ぜん知ち識しれ教きやうを。頼たの母ぼ
 爰こゝらに信しんじて。捨しや身みん決けつ定じやう乃のち思おもひ一いつ筋しん了りやう

行狀記下

念仏を修む故に不覺に業を積んで往生を
 遂ぐ。日は一とて悪人きくら。俄に心
 を發して稱する念佛して。生る事と
 得る事。誰にも今日無事。其れ母愛
 心と發し習。我が心。底をきく。實
 小に教ふ。業もや否と。穿鑿とべし。何れも
 穿鑿するが要なり。世に大なり。心小
 ぬ内。人よ。誤り。於集會して。海を限と

法が如く。鬼角徹透乃場。落著せで
 ち叶ぬを。文字言句。小かちりて。人
 對して。其理を説く。藝に類は落く。
 自己小ハ。何が實とも。只ひ。方なく。日
 をくれ。或は法を。夢りて。世渡り。こ
 財を積む。長生を。計較ハ。云小や。及人。ち
 顔。尻入。及れ安ん。い小。人。同。答
 乃分明。ならざる。念仏者。とい。法。身。乃。恥

行狀記下

辱をうと。随分^ますこあめり。其^{その}要^{よう}と稱^{げん}し習^{じゆ}
ひく。人^{ひと}よ募^{つげ}を具^ぐと心得^{こころえ}。希^{まれ}小^こ他^たれ志^{こころざし}あり
て。幾^{いく}度^{たび}も一^{いつ}大^{だい}多^たを致^{たげ}き合^{あひ}るこゝろてハ。今^{いま}と
決^{けつ}定^{ぢやう}たりこゝろ。痛^{いた}やうなれをど嘲^{あざわ}る。其^{その}云^いふ
れより取^とあるかと押^おこくとへた。前^{ぜん}後^ごお違^{ちが}して。
不^ふ実^{じつ}を疑^{あや}む。又^{また}人^{ひと}毎^{ごと}小^こ念^{ねん}仏^{ぶつ}やせむ。往^{むか}生^うはる
ふと。心得^{こころえ}し浅^{せん}深^{しん}とあまじくも。多^{おほ}くハ耳^{みみ}なれ
て。常^{つね}れ心得^{こころえ}いふ。なまこゝろてゆく中^{うち}。一^{いつ}息^{いき}復^{ふく}

らざれむ。則^{すなは}後^ご世^せは属^{ぞく}する事^{こと}を切^きり思^{おも}ひおろ
人^{ひと}希^{まれ}なり。只^{ただ}世^よ二^に亦^{また}世^よ三^{さん}れ大^{だい}多^たを人^{ひと}並^{なら}
くに思^{おも}ひ過^すこゝろ。悲^{かな}しきれ上^{かみ}代^{しろ}ハ
文字^{もんじ}を。書^かき見^み。知^ち識^しよす。口^{くち}に説^{せつ}問^{もん}
乃^{すなは}事^{こと}に。悲^{かな}し。閉^ひ目^めして。静^{しず}小^こ思^{おも}惟^ひし。世^よ
一^{いつ}大^{だい}多^た呼吸^{こくき}よ在^ある事^{こと}を。急^{いそ}に思^{おも}ひ定^{ぢやう}む
べし。又^{また}或^{ある}一向^{いこう}善^{ぜん}惡^{あく}因^{いん}果^{くわ}乃^{すなは}理^りを。知^ちら
ぬ人^{ひと}れ。思^{おも}ふ事^{こと}小^こ。常^{つね}こゝろかくあま。終^{しゆう}

行狀記下

十八 念仏申て。往生せんぞらん。又今生も
う。かく愚なま。未来にハ。浄土よまの
べしれど。よろしく心をやりて。喻へむ身
者れ心よ。今年こそかくあま。明年ふは
は。こそと。思ひ。何を待ともなく。控
く。侘しく成行ぐ。あま。平生より。臨終
と。まろく。今生より。後生ハ。劣りて。一
判と取も。つと。数多し。是等ハ。論じらる

是ら。彼智者。学匠と。え。又勝ま。る
念佛者。哉と。す。人。臨終。日。は。不
相。て。目。出。た。思。純。に
と。念。仏。も。折。く。申。に。位。乃。老。人。又。ま。ま
女。直。よ。念。仏。法。門。入。り。よ。り。
善。く。死。期。を。知。り。勝。瑞。と。も。感。づ。て。
往。生。を。遂。る。者。回。有。ま。ま。ハ。輕。母。友。飲。み
心。を。殺。して。ま。も。れ。く。不。殺。よ。棄。る。家

故なり。其もれく業なる事ハ。在安し。
 詮と只糶念仏米に皮を剥いて。実をこき。糶少云
 りを。実よ信じてべし。古来実乃ちこの念仏
 もを。輕く免て毀した家言よて。なべて
 人是を初まじり。えより念乃ち念が。糶念仏
 けりもりし。真実よ思ふを。肝要とて。喻
 つも農まれば田作もるに悉糶とれまじり。あま
 をりらし。天が下を巡家とも。米同然よ

志す。請取んと云人あるべくらば。されむ
 如何もして。是を實乃米よ等く求給ハ
 ましと。人再移むべし。日夜勤こ居
 家外なり。爰に慈悲もる福人有り。不便
 乃事もち。我いふ。おれまも。其糶を實れ
 糶れ價小して。買取るべしとあるを。皆傳て。
 進る人有り。曰甲斐なく。勤こ居家暇了。
 かの福人れ許ふ。好との教よ任せ。こもく

行狀記下

ゆきまゝ。實に不遠。悉買取まぬ。農夫感
涙。子咽て立降り。廣大深恩あまが
と。妻子ととも。に。ゆくれ。怪ぶ。が。あ。ま。く。濁
世末代乃。元生ハ。難念紛飛して。眞実
ら。さ。る。子。を。仏因中。小志。ろ。く。あ。り。て。諸
仏法中。れ。控。し。洩。る。元生。妄念。れ。中。より
我を。輕。く。南無。何。ん。と。仏。と。十。考。一。考。に
に。申。さ。し。て。れ。を。大。因。縁。と。れ。し。て。來。迎

せん。あ。ま。く。る。べ。の。正。覺。を。取。り。と。誓。ま。し。し
お。れ。我。建。超。世。れ。新。三。世。れ。諸。仏
に。も。捨。ら。ま。し。し。を。あ。れ。が。ら。小。救。ひ。取。り
申。ハ。彌。陀。乃。大。悲。を。し。ら。ば。や。され。を。こ。そ。十
方。恒。沙。れ。諸。佛。も。不。可。思。議。功。徳。と。稱。讚
し。善。導。大。師。ハ。自。身。ハ。是。深。惡。生。死。乃。凡。夫
なり。と。位。して。念。仏。せ。よ。と。勸。誘。し。國。光。大
師。ハ。身。れ。善。惡。を。れ。乱。不。乱。を。心。と。し。て。心。口

于快記下

にも世何うも仏と申て考にはけりて。決定
 往生れ思ひをせしむべしと仰られしを号
 きて名まじし。此念仏と云ふのふれどして
 何ぞや如世信し得まじし。今までハ我申
 念仏が。本教も叶もや否と。あやふし
 を。此が如教もて有るよれ。扱もさして
 あまかきしと思ふ。歎盡れ公。公乃大教業
 加ふ。加持せしめられし。いり乃まにり。此之轉

じて最上眞実乃念仏とれる。幸已と公に
 初るべし。されむ彼難行門は。墮獄さるべき
 者も。浄土門は。入家時ハ一稱一念也。高
 體。此も永く生死を離れて。極樂に生る
 家も。喻へむ。此乃一滴水。天下にあり。此
 が。いづく。又磐石を海岸に波むとほる。小
 自力を以て。激流に碎き。灰れ如く。はと
 ち。本性が石なれど。浮るを得べし。らむ。と。さ

行狀記下

むかしとまじり罪惡乃磐石も。本教乃舟にの
とれを安うりまじり。かく思ひ取く。念仏せん
入。百も百なりが。千も千れが。往生を志
とびくまじり。仏祖乃教も。虚説なりべし。
異仏教乃不可思議能所混合乃。交わりと客
言畢く。余又曰。今世小多く見字及。亦と持
も。仏祖の制滅と。まじり。背して。あ
らゆる。乱行を。なす。而も云。我罪深し。

やつへども。未五逆より。らば。仏乃本教。不
く。往生を。遂む。疑へ。うらむ。か。家。を。ひ
れ。安心。し。怨。ら。く。混。せん。者。を。小。者。体。の
明師。是。を。判断。し。珍。へ。但。も。か。り。小。智。を。に
いへ。も。衆。を。り。取。な。け。ま。其。慚。愧。れ。を。を。

已下三首愚詠

や。と。好。む。思。ひ。て。れ。も。難。波。写。共。に。あ。る。業。を。知。り。や。
又。等。し。く。悪。行。す。ハ。落。入。と。い。ふ。魚。と。も。心。

行狀記下

ちりまじは異なりらば。

はまねくして世ふもあつ哉。恥一た公は色一外にえ種バ。
されど因果ハ目前ハある乎。成怒怖して。
後乃世に報いと思へ。あづれるを直も同。我親をきて。
本書小述一ごとく。師乃平日念仏に安ん
を同なるに我昔日今に安んをきて。燈を
しく。苦修難行とせし。只宗祖乃一投起請
乃外了ハ。ある事努く有べし。はと乃こ。

教誡ト珍へし。されど上來附録乃趣了。粗
符合さる事あるにより。若師は在世に因縁
なきて。仕を慕らざりし事と。追憶さる人。
世に状記と名ん時其心を得む。とも先師
没後乃結縁とも成魚記くと。末に附して。
あとも亦梓小述む。以上附録回答終
○又師乃在世余に命じて。没後禁乃寺に。
墳墓及位牌をも珍魚うらむと。嚴密よ

行狀記下

仰おほせを慕こぼしううせえ

亦ト并な乃の後ご

数と月げつを強つよて。

か乃の骨こつ灰はいを

流ながき

河か色しき了り

臨のぞむ。骨こつれ水みづ屋や小こ

あゝ

忍しのぶ

忍しのぶ

してささとと取とりあげて。

葬おとすししの情なさけ思おもひに。

かゝ

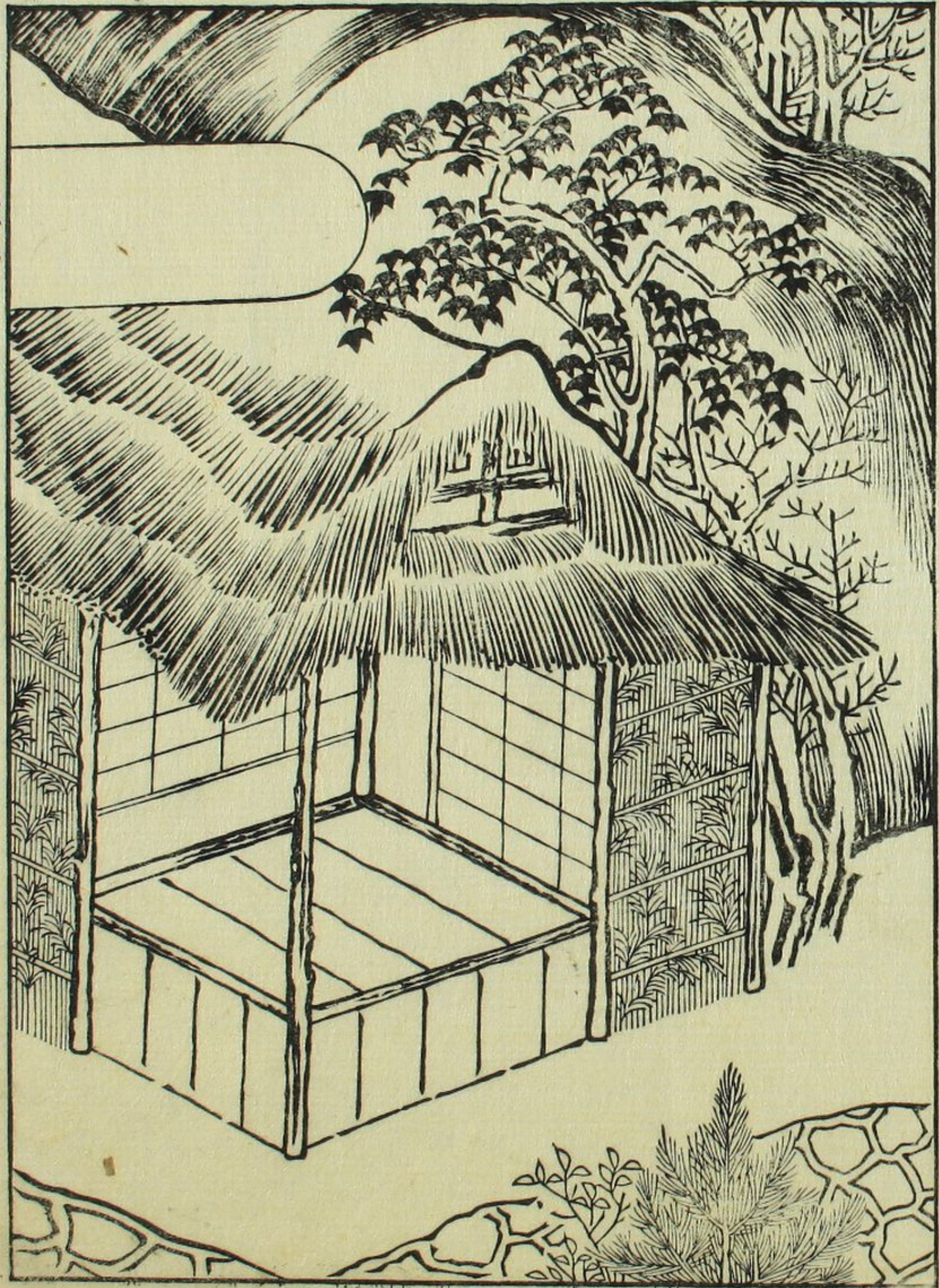
顧こ命いのち了り

背そむく。墓かぶ所ところを

建たて先せん蹤あとれをしりし

行狀記下

行狀記下



あゝば

且遺跡を

存る人々

さざれ

からぬぞ。

自他乃

希求。ゆきと

得ざる。かれ

空室れ

二十二

わとまに

巖窟を

穿て。裡小

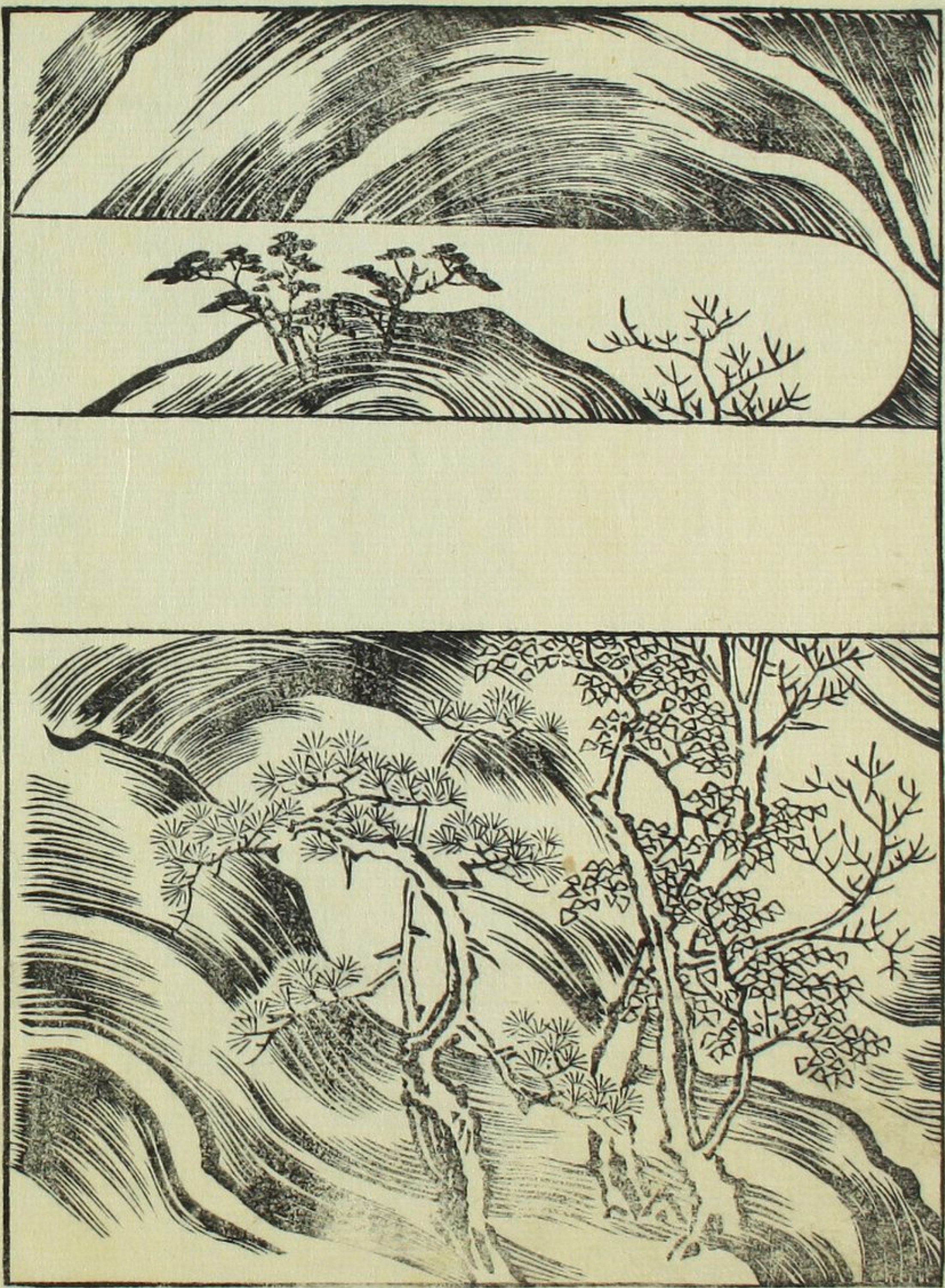
師乃石れ肖像を

安置して。

傍よ石碑を

建り。





○此書乃刻板世流布此為よハ非也。先師に
 法縁を結いぬまひ。高貴又ハ諸國乃
 俗余り方小一向僅され。行状及臨末の
 事實を述求せらる。事。数多ふして。い
 ちこがし兒も筆力れ芳よ堪む。記中を悽
 然りさるれ。いづれといへども。板に刻むかの有
 位よ贈る乃こ。

諸嶽見佛真偽辯

行状記下

曙過一峰。漸絕頂。隣々。先達此界。
 四方。凡々。地を。あふとさけ。詠く。すえ。地
 来迎なり。といひ。きりて。高き。所。よ。かき。登
 まる。我も。亦。隨。逐。して。よ。ち。登。る。に。遙。れ
 う。所。の。大。なる。峰。に。五。色。の。雲。環。繞。を。り。暫。有
 く。此。中。より。金。色。に。して。沛。長。一。丈。六。尺。を
 かり。も。や。あ。ら。ん。と。ん。そ。さ。せ。給。ふ。阿。彌。陀。仏
 及。親。音。勢。至。ハ。七。尺。餘。り。と。覺。えて。次。弟。に

あり。す。こ。給。ふ。時。不。平。して。左。右。及
 後。を。顧。み。し。れ。れ。も。露。も。た。が。も。を。給。も。ぬ。三
 體。乃。容。れ。却。四。方。小。は。面。貌。を。か。も。照。る。二
 十。間。計。小。近。より。給。ふ。ま。よ。く。目。を。注。て。抱
 くる。に。其。佛。各。視。瞬。乃。相。あ。ら。ハ。を。も。も。も。ハ
 いろ。小。佛。乃。真。身。に。も。瞬。あ。ら。こ。と。れ。と。こ。そ。
 笑。か。と。只。一。念。萌。せ。と。限。り。に。忽。現。の
 三。号。側。乃。人。と。志。り。侍。ら。ば。我。目。小。ハ。あ。と。か。

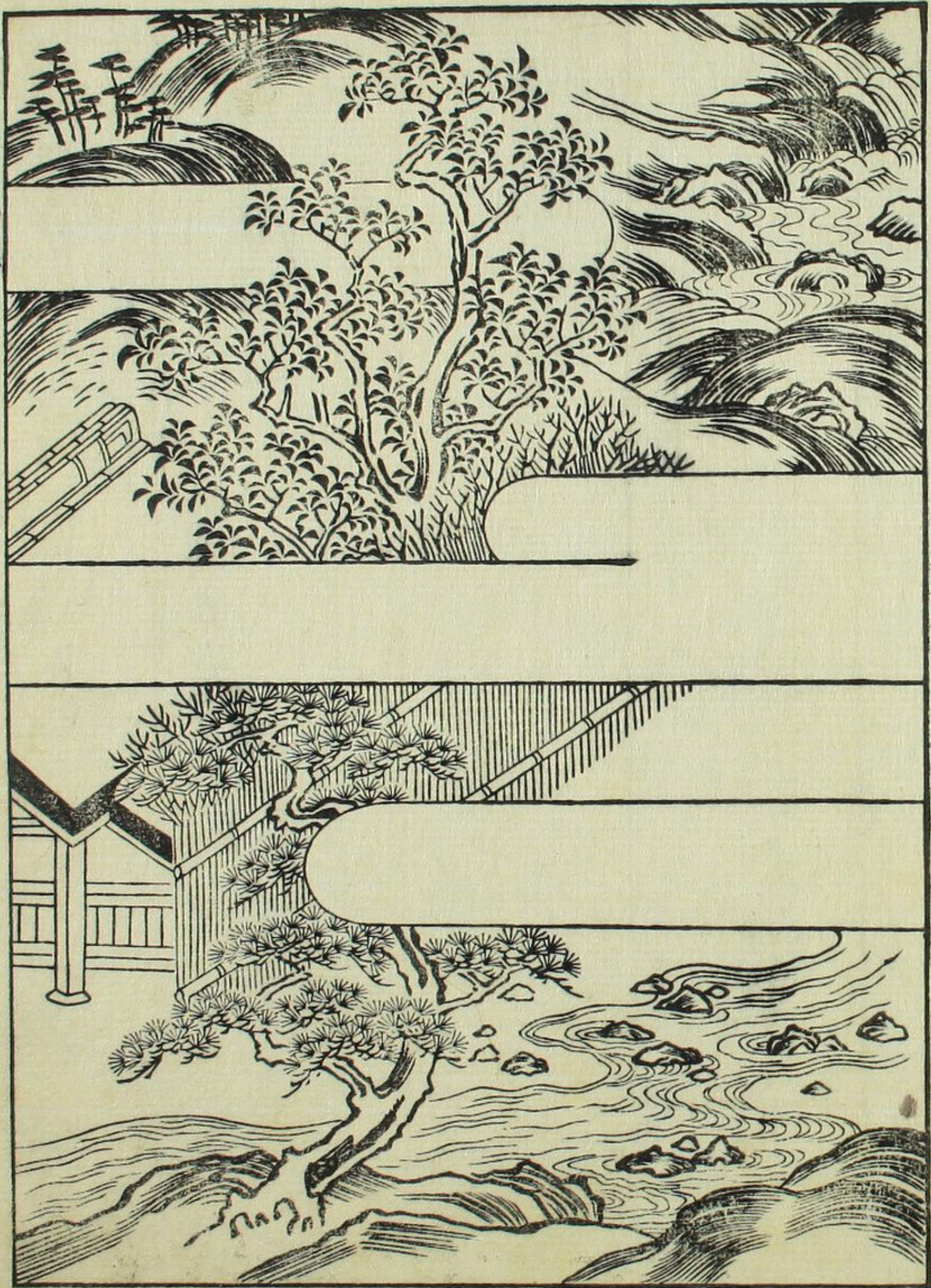
行狀記下

もれくからけらて。皆見失ひまじぬと。余爰
 にまじく。思惟をらく。吾雙に高山ふして。朔
 日夕日け彩。ま乃をわ乃面の雲に。うけまざる也。
 千變萬化なるに。凡心暫多これ起位。小感ト
 得る。れも。且上來乃現。前ハ古より。靈を象
 土地よ。即き。ゆへに。あるまるとにこそ。但日中
 小。世境をおかりさし。も。これ。古来一人も傳
 せに。依蓋旭乃うけらへる。感見をらんりる。

又恐らくハ。只小ふられ。無智れる俗。頻に希
 望をよまざる。念に。糸トて。不審。狐狸天物やう
 けもの。變化乃所。心からむ。は。ま。か。乃。凡
 夫心にも。一会前。以。所。正。見。小。破。ら。ま。こ。く。
 跡。なく。消。う。せ。し。に。と。あ。ら。ら。ざ。や。これ。我。先。師
 か。乃。高。岩。よ。て。三。昧。發。得。し。終。つ。場。と。ハ。同
 日。れ。論。小。あ。ら。ら。ざ。象。乃。證。昭。然。ま。ま。こ。く。

以上真偽辨終

行狀記下



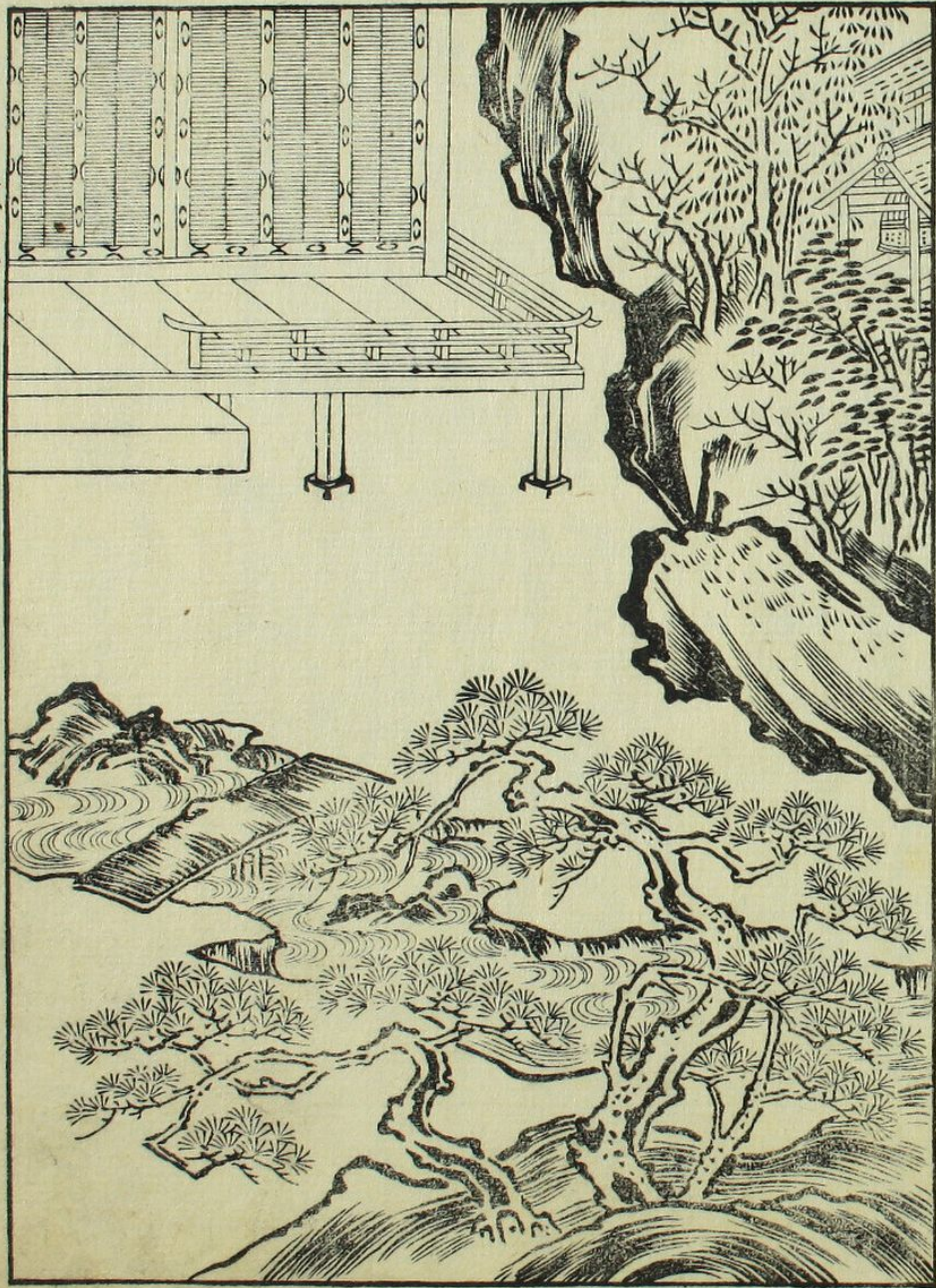
行狀記下

○上來^{いさ}虫^{むし}記^き乃^の未^ま後^ご蓮^{れん}花^げ。没^{ぼつ}後^ごも深^{ふか}く秘^ひま^まへ
 一と。師^し望^{ぼう}く示^し一^い並^なみい^いこ。むへ末^{まつ}代^{だい}の童^{どう}瑞^{ずい}
 なれむ。猥^{わい}よお^お腕^{でん}とゆるさん^{さん}に疑^ぎ滞^{たい}と
 起^{おこ}と人^{ひと}
 あ〜とん。

自^じ他^た其^{その}派^{はい}輕^{けい}くら^{くら}と。
 或^{ある}高^{たか}貴^きれ^れ津^つ下^げの
 突^{とつ}庫^こ了^り。

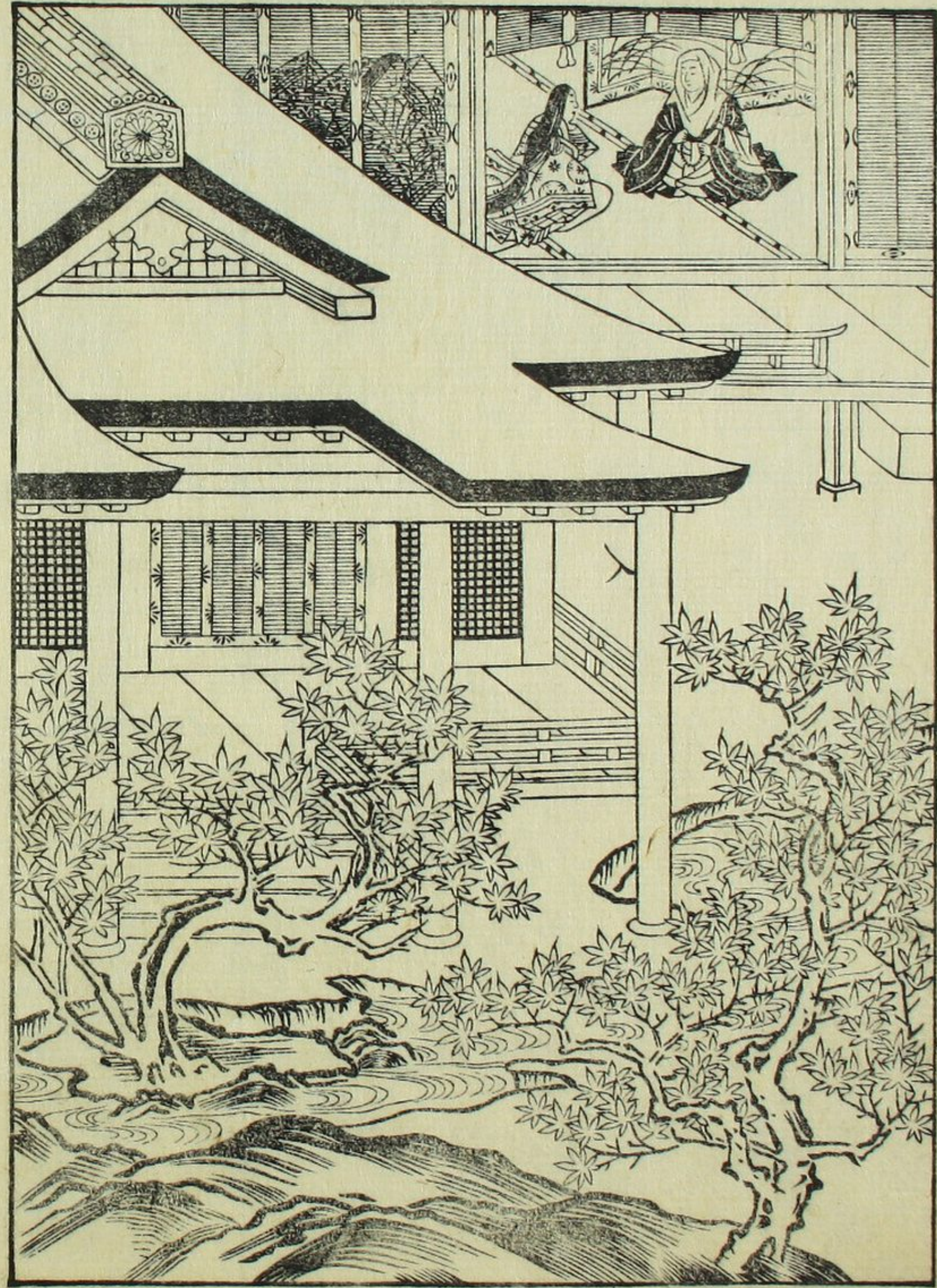
村^{むら}一^いく
 秘^ひめ^め並^なせ^せあ^あへ^へる^る。淺^{あさ}
 々々^{々々}ぬ^ぬ津^つ因^{いん}孤^こあ^あま^まて^てなり。

行狀記下

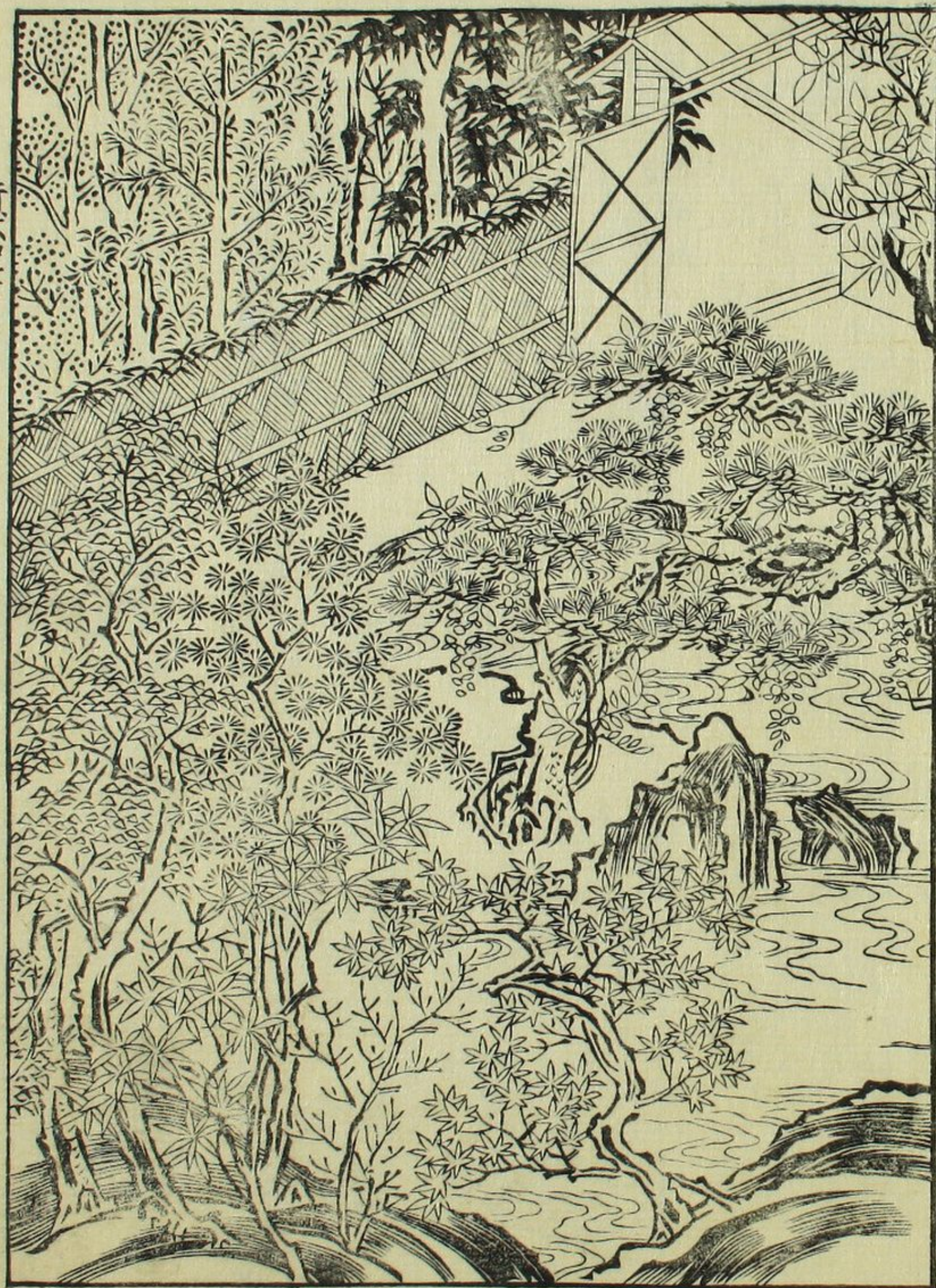


二十九

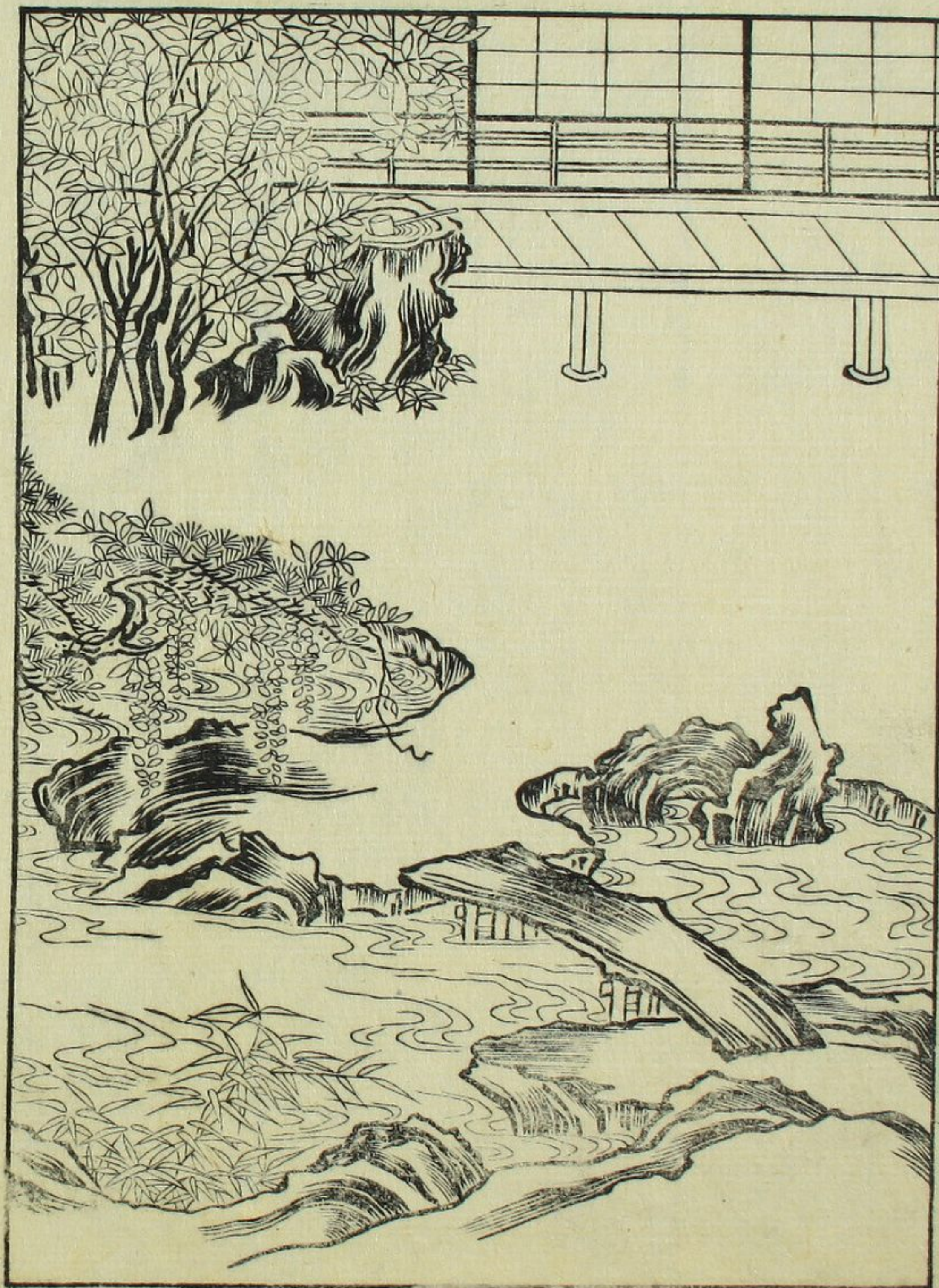
行狀記下



行狀記下



三十一



三十一

○此書れ著述ハ甚も師乃存れ沙ノ業して
 行状記乃體小背き。表地を破し。身ノ様小
 思ふと吐く事。全自れ功を徇了似
 せりといへども。其據ハ。意氣なくも高貴
 よりして。下賤ノ及ぶべし。毎色折度
 れ寸志より。世く生れ。乾海乃水口あり
 と。思ひ初し。誠實にま死く。怨らくも。
 仏祖乃照覽ノ意なる所也。見心人幸に拒

斜眼ありし事。且余年比乃病増す。命
 終も近く笑れ。此出れ著述と夜日に繼て急
 ち。毎これ吟味にも及び存も。文字乃差
 誤。假名乃づいち更る。ことわりも不明
 小して。承さ笑もや孫さむ。それを因縁
 として。一佛土乃回向もなす。あへしと。
 一覽れ表地に。前存を送して。云こと志あり。

維時始辛丑年首夏。洛北大原古知谷
 行状記下

山上先師乃空室に目を強て。仙授
薩埵未敷蓮祀と著述して後。其卷
小増補さる事享保七壬寅年十二月
に至て。洛東に培蓮居。此行状記を
全備一畢。

不肖弟子常宇船石泣血稽首



上東書記の事一々悉誠実
ふれと懇渾と人々以我和此
行状不可思儀なる哉因と彼
生存強日疎更と大原今令
草盧と訪教示誠故一乎哉

行状記下

進懐して淨業と増修

一 早

右此真書及一部三冊外題高峯乃
 在先師在世に傳仰位淺くさり
 故今世とれく賤とれく並て世人廣く師
 乃誣と信教あつたやと真之真に希求せよ世
 々小により殊更小汚染等成下されし
 實小惟未曾有に淨誠は非也はまを一切
 世間乃人小勅をもか縁勝縁によりて先師
 没後此化益小新んと教ひまを師乃正

行狀記下

く遷化志の旨までえ。要と勅化者！
彼十方人云。融通舍等に入。信印乃名号。及
印符を受。各日願念仏百劫と勤く。必浄土
は詣。上正令れ。決定業とあり。心平成
且何國よて。い成人乃勅なり。是等其念
佛舎に入。名号印符を受。あらん。一抄
一帛之報謝乃財を出。あべ。若さえ。類
類あらん。筋も。世後乃偽者と知。あらん。

澄禪和尚行狀記遺事

洛之培蓮居常宇隱士使余法姪先為持其自
撰澄禪和尚行狀記來囑余謂曰我聞公嘗慕
師高風為立小傳知師行實請須題識是狀證
明其信幸莫辭焉余繙其狀朗讀一遍其體製
和字記事每章援引先蹤誘掖勸誡蓋非行狀
之正體也然件繫群行鋪叙不紊師發心剃度
苦修異迹一生履歷以至命終葬收滅後遺囑
之事燦然昭矣師道之迹傳於後世實啟於是

其用心可謂勤矣余乃愕然掩卷而歎曰嗟乎
師也巖穴幽栖之高人士素遺世味其終老於山
林單身隻影心口相語其傍無有一介杖屨侍
者遂順寂于白雲烟霞中則孰勒其遺行以詒
于後世哉余嘗為師立小傳蓋由此也不意師
亦得有如是之門人能發斯言能成斯舉余嘉
其感戴師恩之志篤且惜余文蕪陋縱題識是
狀其力不能使讀者驚目動心至感激奮勵亦
不足以發揮師德烈之壯矣是余所以掩卷聳

愕為咨嗟大息也既而謂為曰今以余小傳參
考狀之事實於富士見佛塞橋現前並天仙龍
鬼之感是余所未聞而小傳所未錄也於是乎
余乃歛容屏氣遐思師之德行其高風峻節以
為若祥麟威鳳可希聞不可多見益致歸嚮之
誠也微隱士是事其遂泯泯矣其補弼師道之
勳不亦大哉然隱士唯得知師一生踐履經歷
於曾我塔峯之巖窟平子大原之茆宇而終不
設厠及浴具而未得其事之確實又唯得知師

嘗蠶豆齋食不須餘穀而未詳其節量多少是
隱士所未知而狀之稱述所未及於余小傳之
精密也言未既為蹙然改容謂曰是何謂也隱
士于師屢咨受法門親灸者久矣而公于師未
嘗面謁其踈闊者猶胡越然矣而所謂有狀之
稱述所未及於公小傳之精密也我竊疑之縱
公言之而孰允之耶余對之曰我有說焉其事
確實子若聞之則知余言之必為有據也今姑
舉其槩而言之子諦聽焉余嘗肄業於武府三

緣山增上教寺從廓瑩和尚北面受教時有沙
門至玄者於瑩和尚門下為衆寮上座余與之
共同房修學交特厚矣玄公為人志節堅正寧
凍餓殞其生佛門之大經不可之失者猶荆南
之金色百鍊而不變非其賢過人能若是乎其
清操志節頗類師是故玄公少時嘗於緣山與
師相友善矣而師蚤逃緣山晦跡于相州塔峯
其後瑩和尚適撰往生要集指麾鈔刻板京師
瑩和尚使玄公校讎之玄公奉命乃往京師僦

洛北小廬而僑居焉校讎之者蓋有年矣未幾
余歸省母寓止于洛西念佛寺時訪玄公小廬
其旅況一室蕭然弊衣掬饌艱辛不可言而玄
公處之無斁其色裕如也終日談話其言未嘗
及世事從容唯譚前人徃行經論至理耳動不
知夕陽之在樹極歡而歸凡每訪皆如此一日
訪之清話如恒談及師事玄公告余謂曰時雖
澆季我門不乏人爰有禁戒守真威儀出俗官
榮無以動其意親屬莫能累其想高踰人天重

過金王者忍耐進行克至是公有志於道須感
勵矣余瞿瞿驚起問曰若公言者則是實一代
偉人宗門大尊宿也不識其人為誰願聞其人
所在及名稱也玄公對曰有沙門澄禪者我同
法社淨業之徒方今苦行于相州塔峯之石室
是其人也而後其發心出家之緣精勤練行之
迹歷言其詳云云者大槩如是狀所記玄公語
訖亦誠飾謂曰吾人也彼人也若無心力修何
由而成苟力修者或可企及正應各自努力耳

公有志於道，須感勵矣。自是凡每余訪其小廬，十而八九，其談必及師事。至若玄公為澆季衰俗，憮然而增慨。又逢釋氏圓顛之徒，孳孳焉惻惻焉，以告進修之道。苦口為激勵，勸發則皆以師為證，用慰其不逮絕望之意。使人聞風而躍躍興起也。玄公能知師高尚志趣，慕其苦節清修，思之切惓惓不少忘。大抵如此，又師嘗避人寰，隱遁于重山密林中，固欲以省塵務，以銷世慮耳。未始有以巖廬雲衣眩曜人之志。苟有善

事適意，則不膠膠山居。時出城市，其太畱之際，不繫繫於物，與浮雲無異。是故一年師欲遊方，以為周行五畿之間，巡禮名山靈區，乃自相州塔峯杖錫西邁。道出京師，師自意謂嘗聞綠山同學，至玄師今在洛北，校閱要集，指麾鈔索，居雖久，道交是親，願借其房，暫為替留。晝則遊行，夜則止宿。因師赴洛北處處求之行，至一舍，竚立其門，將尋問玄公房所在，蓋其一舍玄公所。徼小廬東隣而即是廬主之宅也。時師行裝短

褐破衲負柿漆紙柿漆能防雨露是故糊紙為一包廬主之婦自內竊閱視之以為乞人呵紙漆卻之曰乞人何從而來彷徨於此其速辭去師曰我是遊方之僧也非乞憐於路傍舍求他殘羹剩飯者敢問沙門至玄者之廬其何在耶婦人得知幸賜提引因具述來意廬主之婦大為駭異走玄公廬具告其事玄公聞之喜踊謂曰是我高賓武府緣山之故人也乃屣履出迎執手入廬共說故舊接待懽然師乃稅所負一包

以置座右適日既將中玄公知師齋時欲為設食而時玄公刻梓急速無暇校閱愛薪水畧竈不舉火寄食東隣廬主之家因請齋廬主師止之曰糧食隨行公勿勞慮我今熟視此公小廬破宇漏簷四壁蕭條釜器皆悉附遊塵都無炊爨之迹其荒涼之氣象恰似山中之趣甚適我意請須我寄寓此廬之間莫以我從遠方來為講主賓之禮招友生以為慰問集同好以為旅館寂寥之伴唯借一床則足以容膝矣此是恩

意大越於天廚珍膳之優饗凡勞來客飲食之
整卧具之供一勿勞慮言竟乃釋於向所稅之
座右一包無有餘物唯一紙囊耳師自囊中出
蠶豆十二顆許祝願食之既而自謂曰今日屬
厭我齋畢矣廬主之婦素有淨信聞向玄公師
為高賓且為武府緣山之故人其夜自為具饌
來テ笔師懇謝厚意而少不食通宵不寐坐至天
明翌日爽且出而遊行迨昏而歸玄公問曰終
日歷行必可疲勞且糧乏無飢耶不知今日齋

時何ラ食師對曰久居山中足熟嶮岨故不疲勞
隨行蠶豆是我香積故又不飢每日齋食唯此
一包而足矣其夜亦遂不食凡師寄寓之間天
雨或陰則不出行其齋時食惟蠶豆耳自囊中
出者亦可十二三顆其節量多少與始無異若
晴日則出而遊行迨昏而歸其夜不食亦皆同
始師稽留小廬凡二旬餘其間玄公終不見師
有登溷便旋之狀又未嘗沐浴而其面色肌膚
遂不垢穢又師與玄公往時從一分袂于綠山

以來淹為乖闊今日再得相見極其歡情而未嘗言世間雜話戲劇之事時唯譚山中幽趣往生心行耳而其言有味旨致深遠殆非昔日緣山同學時之比也又其齋時一食甚少且出遊行迨昏而歸而通宵不寐坐至天明遂不見其疲勞偃卧之態玄公與師同廬凡二旬餘親既目擊是等奇迹決然知師異人益固欽敬之思也師將辭歸玄公問曰師乏治裝之用其奈長途逆旅何師對之曰近年何往唯負是一包而

已曾無寄宿洗脚之費何者我雖夜行不有危懼之虞是故晝夜共步行未嘗投宿於驛亭若遇大風雨則展開是所負柿漆紙一包以蒙頭覆軀暫坐憩息於樹陰或民舍檐下風纔恬則冒雨而行我旅行之狀皆如此何以多須辨裝之費為耶歸路依宿公勿勞慮寄寓之間恩意是至故人情厚致謝而去時余適嬰疾數月不訪玄公小廬愈後訪之裁排蓬扉玄公急速踈闊問無恙外無暇出餘言遠爾謂曰乃者我有

大賓有盛會惜乎不使公得相見也余問曰
大賓何人對曰我以為大賓非是搢紳俗士高
軒僧徒平日屢所語彼相州塔峯之禪公也來
時艸廬增光輝雖太遺馨尚在矣惜乎不使公
得相見也既而師寄寓小廬之始末其間奇行
異迹為余具語如上所記因余問玄公曰今日
聞未曾有勝士公之所說極為明著同得相見
誠禪公者佛門之獅子法海之長鯨也不意大
法凋零而能見斯人非是言辭之可贊禪公之

德猗歟盛哉然今聞所說禪公寄寓凡二旬餘
每日遊行是固可疑何者余視每歲諸方男女
來於京師巡禮于洛中郊外名利靈蹤者才數
日而足以歷覽矣盡其委曲者亦不過一旬而
已然則禪公歷觀京師逗宿二旬餘每日遊行
何為多耶玄公對曰我亦疑之然意者禪公寄
寓二旬餘每日遊行非止歷觀洛中郊外其間
五畿名區徧印其足跡乎我有例證公其聽之
頃年有緣山同學一舊識來而語曰方今相州

塔峯苦行之禪公奇迹甚多矣我特知其步行
太捷疾殆似神通謂一年武府某寺承公議命
以恒所審愛珍惜像設墨痕徧許瞻禮蓋寺鎮
之絕品一時之壯觀也諸州奔走士庶為群一
日禪公亦欲勝緣往作瞻禮蓋自塔峯至武府
約二十二三里所是從本邦封埃而言之若以
餘且發塔峰至武府某寺具作瞻禮因訪緣山
舊識清話移刻迨晡時歸往反約四十餘里是
本邦封埃若從支那里常人步行五日程師僅
程則凡二百七十餘里

經五時而時師足躡木履云人咸謂師有神足
之證也緣山同學舊識之所語如此然則禪公
寄寓凡二旬餘每日遊行非止京師恐周遊五
畿之間乎由斯推是事則公滯自消矣何疑之
有玄公對竟日已薄暮夕陽春西期再會亦盡
歡而歸自今計之多歷年所恍似隔此生也嗚
呼玄公已沒舊矣果何所之精爽必有靈今升
樂國徜徉于審臺瓊池乎尚乘空而一下聞余
說往時余語及之無限感慨如涌而湊於心頭

涕泗潛然流既而收淚告為謂曰玄公為人篤
正生平致言極非孟浪今之所言何有虛也玄
公口說確實如斯是余所以向為師諸方履歷
不設廁及浴具並蠶豆齋食節量多少者狀之
稱述未若余小傳之精審也子其留意因為問
曰有生之便溺者蓋水穀之所化也苟水穀纔
下咽則有便溺者決矣然師水穀已下咽而無
便溺先古未之聞也況今時哉奇之又奇弗克
無疑不識先古復有是事否余對之曰有是我

聞之也為亦問曰出何經傳其以實對余亦對
曰古有是事非止一人謂一聖二賢也略申其
證以酬子之所問也如觀佛三昧經曰時耶輸
多羅及五百侍女或作是念太子生世多諸奇
特唯有一事於我有疑采女衆中有一女子名
脩曼那即白妃言太子是神人也奉事歷年不
見其根況有世事復有一女名曰淨意白言大
家我事太子經十八年未見太子有便利患况
亦諸餘爾而無便利之證也佛祖統紀曰禪師

行滿萬州南浦人棲止華頂峯下智者院夜卧
土牀燒糞掃以煖其下脫衣就牀蚤蟲群咬或
捫其衣寂無有也所居檻外大松上有寄生小
樹遇師出座必孛孛低俯師於四十年間未嘗
便溺或謂大士現身受食而實不食故致此也
又同曰法師有倫四明王氏自號梓菴講導有
旨晚主月波學徒說服所居一室未嘗見其便
溺人皆異之或問其故拒而不答是二賢水穀
利之證也蓋是一聖二賢古既然矣子若以一聖為

據以二賢為證則師水穀下咽而無便溺者疑
滯自可息矣子其思之因余亦告為謂曰狀之
稱述師之履歷自曾我至大原凡三州四所三
十餘年未嘗睡眠又玄公口說曰師寄寓洛北
小廬凡二旬餘每夜不眠坐至天明二說符合
其事確實而或疑之不得弗辯因隱士狀中辯
之曰光明大師傳曰大師三十餘年不暫睡卧
援為例證以解他疑然余案之慈雲淨土略傳
曰善導阿彌陀佛化身然則三十餘年不暫睡

臥蓋是弥化神用大聖應化理絕人區豈可以
禪公例同之哉凡聖混同猶章甫薦履必不合
矣加旃分別功德論曰佛為大會說法那律坐
眠佛見謂曰今如來說法汝何以眠耶夫眠者
心意閉塞與死何異那律慙愧尅心自誓不敢
復眠不眠遂久眼便失明所以然者眼有二食
一視色二睡眠那律以眼失食故喪眼根佛弟
子那律尚以數日不眠其眼失食故忽失明況
澆末禪公已於眼失睡眠一食者三十餘年何

為不忽失明耶又古高緇圓智法師黃巖林氏
依真教仙師于白蓮學通教觀後誦法華以知
法常無性佛種從緣起豁然有悟以白真教教
曰法華止觀此為喉襟汝今有悟大事斯畢自
是遊心道妙五日輒一睡即此觀之則法華止
觀悟入高緇尚不能全無睡眠五日輒一睡況
澆末禪公安知觀佛口稱靜坐之間無有暫時
一睡哉或疑之不可不辯余辯之曰禪公雖受
生於澆末而其觀佛于富士絕頂者自九月至

二月凡十餘旬斯誠今時之所尤難而先古亦
所鮮有也特於三冬凝雪之嚴辰不以寒慘於
涸陰冱寒之高嶺能不凍死以至遂得見佛聞
其說法審橋現前乘空飛行天仙之感龍鬼之
應是等神迹事出天外其所造詣實非凡情之
可度量亦等大師理絕人區豈以每夜不寐其
眼失食為可同于汎爾常流及聲聞那律忽失
明哉況禪公亦與大師同發得念佛三昧則亦
當以所謂大師三十餘年不暫睡卧之事許於

禪公孰可拒之以為異辭乎然則狀之稱述玄
公口說其言可信不誣因論之斯以俟後來抱
凝滯者之勸也於是乎為拜而謂曰師諸方履
歷不設厠及浴具茲神足捷疾以至三十餘年
未嘗睡眠等之事今既得聞經傳確證玄公本
說及公精議真知可其如此而無毫髮之惑也
然尚餘一問敢請商榷問曰於戲師之群行一
一奇迹孰勝孰劣孰先孰後皆是卓冠當時尊
勝偉特世人之所尤難也是故論者未易多此

而少彼也。然若使公甄別之者，則亦當有崇卑。未知其迹孰最至精，至要敬待商量。伏乞指揮。余對之曰：善乎問也。從來問答說話，皆悉高談。至論而是一段，最為精要。子其靜坐沈思諦聽。所說師群行中，尤奇異而人所駭歎者，富士見佛、塞橋、現前天仙之感、龍鬼之應、便溺之異、先知之神、終身不寐之靈、蹤齋食蠶豆之節量也。然人患不求之爾，苟求而不已，則見佛可成，塞橋可現，天仙可感，龍鬼可格，終身便溺之異未

然。先知之神，每宵不寐齋食，節量皆可得而為之。其唯一事不可得而跋及者，則師當是澆漓之叔，世能起個儻不群之大志。曾我塔峯之練行，巖栖澗飲之苦修，非翅一朝一夕歷涉數歲，日積月累，一旦至志意成，遂大願剋，果能事盡入其手者，則不喜處之，又不自以為得美事而誇示於人。此尚以為空中小蚬，日下孤燈，皆悉蔑視棄捨焉。遂服膺於弥陀之願意，從事于宗祖之密訓，自行稱佛孜孜常課十萬餘聲，化他

勸進亦諄諄專以口唱念佛一行唯是一事師
三昧之所熟甚精微修練之所至最玄極大哉
莫以加矣此是一希有事視前群行諸奇迹非
止天淵之懸隔夙然獨異全非優劣之比也世
淺視稱號者可以淺長思矣為聞之蹶然興起
而謂曰奇哉公言此一總處其義精到始終所
歸宿行狀一部命脉在此何者其立論高遠宏
大而極簡易其理其事不離今日愚夫愚婦之
心可謂至當不易之論矣我得聞此言決定往

生心行上品階級當自此而升矣因余告為謂
曰上來所述竝據玄公口說及余小傳所錄而
言之大略盡斯矣嗟乎玄公叢林苦學凡二十
年才學清操不顯千世年老髮白蹤迹飄零一
生艸廬備嘗艱辛而無悒悒之色抱關之怨遂
死窮困惜玄公之不遇也遇則必有可觀者也
有識者恒傷之因不覺余辭之縷縷具記始末
以慰靈魂時為謹余謂曰我聞公亦執弟子役
於瑩和尚門何不以一言成其名耶余對之曰

如瑩和尚者嘗主于靈山常福二大利領數千
指衆享賜紫金欄之榮其名偉然其著況其博
識德行生平功業事如別顯余嘗為作略傳一
通載在淨宗護國
編成以此思惟夫人以善行成後世之名者有
語考幸不辜焉顧其所遭如何爾方今玄公美名死
而不泯是豈非其名託於師而後傳耶為慨然
歎曰其超絕之資如玄公者尚其名將泯沒而
幸得由師狀存而久光矣嗚呼若為者死則其
名與身共泯沒其誰記之愚姪為幸逢斯勝時

不亦甚可惜哉為名後世有考其不在斯哉願
公賜一言余告之謂曰子於是狀輔贊之功亦
不少矣豈可使之泯泯無聞耶若余題識是狀
者則書言之法姪先為嘗為白衣其家武人祿
仕于江州彥根姓松本名清倫事在扶桑往生
傳新驗部香譽
法雲尼傳祝髮得今法號云因余亦告為謂曰由從
上之事而觀之則狀之稱述與余小傳互有隱
顯然其義符合其事確實當可徵也足以為證
明矣子以是言往語隱士為拜手而謂曰敬聞

命矣然隱士意固欲印是狀跋以公文申狀不
妄助他生信其志懇篤幸莫辭焉公若作跋文
何以書之余對之曰余於師慕其高風久矣今
聞隱士狀師行實之盛舉何莫敢吐一語以相
可否耶然空言無益於世著之行事則大裨師
道是狀題識豈別立稿宜卽次第從上余之與
子問答說話而歸之也為謂余曰然甚好而若
公以文書之則累牘長篇幾數千百言何其跋
語之多耶余對之曰夫國史當略家傳宜詳其

法則然加稱余於師凡一事之善惟恐泯沒敢
以欣慕之私發狀未盡之意文辭雖繁而不取
殺者其意蓋在於斯也然文章以體制為先若
失體制則不可謂之文矣夫題跋者簡編之後
語也文辭極少則僅數十言稍多則百言或二
三百言其文最煩亦亡慮唯止於五六百言而
已其體制與序引後序不同專以簡勁為主然
則今此余之與子問答說話成之文字則若子
言幾數千百言豈以題跋而命之哉余意固補

狀未著之事以擬遺事子語隱士余今從上問
答說話書以歸之者則宜以余文號曰澄禪和
尚行狀記遺事也又余白一切同志知識等師
為人謹慎雖有溢於中而不敢揚言於人是故
今此行狀記及余遺事之所錄豈若止十纜二
三及存十一於千百耶蓋於師德行無量數中
百千萬億分亦未及其一者猶欲以蚊虻測於
海底側一掌以翳日光多見不知其量也非徒
作溢辭諂諛於師矣隱士之請不敢固辭遂書

以卑敬為證明讀者諒之

享保七年冬十二月二十五日

攝州法泉寺沙門珂然謹識

或問我聞禪公遺旨滅後墳墓銘誌等堅制
不許然則狀行刊版以輝餘光非其素志公
亦何作遺事為耶余對之曰是事有說乃論
之師塔銘詳于銘並序辭子若讀之則其滯
自息矣編輯次下故不辯此

洛北大原山精蓮社進譽澄禪和尚塔銘

昔者梁伯鸞父沒卷席而葬王孫裸葬墨夷露骸是世間通識者皆以性理貴於速變況出世間學佛者哉我今於澄禪和尚見之矣原夫師在世隱栖之履歷也巖廬干相之曾我及塔峯縛節干江之平子山之太原蓋徙居干三州四所其道益崇矣特大原即師拘尸城斯是茆宇方最後順寂之處也粵享保辛丑師年七十體尚康健起居無異而師自知報緣將盡豫遺旨

干檀越洛之培蓮居常宇隱士曰餘報不久西邁在近我死則宜勿沐屍勿斂棺即掩以薪直從火浴須解內衣並衫裙袈裟而赤身焚之火化之薪不用餘木即墮節宇以充之閣維已畢則骨灰共收皆盡投之山下溪流片骨隻齒不可留焉而後慎勿起墳勿植志勿設牌許多人役何徒費於黃壤窀穸之事為哉我唯欲稱佛聲與氣息俱盡速跏趺干淨泓蓮萼之上耳其餘復何稀之有哉我後事如此子不忍為之而

挺鐵石心必果勉之莫違遺託隱士曰唯敬聞
命矣敢不如教乎然是茆宇親師衣履之所經
德香之所薰師雖辭世餘芳尚存焉他日同志
者過此觀之則必指是宇曰此是禪和尚之遺
跡也若是則師道德聲容可宛然想見未嘗不
歆豔其遺風高致規規然翼翼然接武而奮勵
也是故茆宇不忍墮焚殊深惜之有饒益於衆
生多矣唯是一事幸師見許師曰其志厚故唯
許之耳其餘如教莫生疑異隱士目觀以師體

康寧起居尚壯未決其師言將然而亦聞其餘
報不久諾其遺囑悽然辭去未幾果如其言師
遷神實享保六年二月四日也隱士聞訃即來
其後事皆一如師教然不忍其骨灰皆盡投之
溪流留靈骨少許相攸于茆宇之側就其幽邃
鑿一巖以作石窟空瘞餘骨于其中且不勝哀
傷之思雇工假石像師影亦寘石窟中用擬師
之塔蓋一以表示追傷之至懇一以使來者知
師平日所好山居巖栖也此是一二後事殆似

踰越師遺囑然是生者之情所不得已又竭門
人追墓之至誠而已既而隱士意謂彼石窟中
藏靈骨之所若唯影像無志則恐後世拜掃人
不知其兆域乎乃於像趺石志名字歲月因乞
余為塔上之銘斷案於其一二後事踰越師教
之可否也余謂其一二後事固踰越師教而不
若是則何以酬其固極教育且無以繫同志之
思景先師之行為弟子之法當如爾豈孰為之
於理乖戾耶余亦頗知師銘不可不作也遂因

隱士之請為造銘曰

| | | | |
|------|------|------|------|
| 傑然英緇 | 苦修無蹶 | 三昧入手 | 神遊淨闕 |
| 而課持名 | 不以異伐 | 天假良緣 | 師寂不粹 |
| 隱士培蓮 | 遂獲面謁 | 身後囑累 | 敬承臨歿 |
| 數笏茆宇 | 茶毘楮拙 | 餘灰投流 | 不允貽厥 |
| 莫起墳墓 | 豈須碑碣 | 從事遺旨 | 其跡泯汨 |
| 不忍視之 | 師教惟恃 | 追其所好 | 高攀栖鶻 |
| 石以像真 | 奉安巖窟 | 用擬塔婆 | 下瘞靈骨 |
| 乞銘識之 | 斷其踰越 | 原生者情 | 違無毫髮 |

大覺定中 奚為其咄 狀及遺事 既附劄削
 奇迹異蹤 簡編備揭 畢竟行實 何以白竭
 萬里無雲 仲秋之月 享保八年春
 正月十五日 攝州法泉寺沙門珂然謹識
 澄禪和尚塔銘成建之大原山師所居茆宇
 之側藏靈骨石窟之外也余謂大原之為境
 蓋山壑之奧區林泉之幽地無有塵寰雜還
 塵氛襲人以稱若師塔銘清淨宏偉之觀而
 人迹至稀唯銘石屹然孤立于翠岑晚霽之

間耳讀者鮮矣惜其傳不博不若印之墨本
 徧頒諸方弘其流通也庶斯行狀所流布隨
 其所在雖遐方絕域使師塔銘巋然自現于
 其几案間乃使讀者免於曳筇于大原山路
 佇立瞻仰于塔銘方趺下之勞因附錄之於
 遺事編末云 享保八年春二月四日

沙門珂然謹書于攝州生玉
 法泉寺
 脩史之室



不勝感幸

畫工土佐末流

遠山常則



五十七終

書肆洛东智恩院古门前

沢田吉右衛門



澄禅和尚行状記終大尾

